

許さない！“戦争被害受忍論”  
全国空襲被害者連絡協議会  
結成2周年のつどい

## 鎌田慧さん記念講演

「3. 11東日本大震災、  
福島第一原発事故が問うもの」



2012年8月15日 台東区民会館にて



さよなら原発 1000万人アクション  
2012年2月11日 代々木公園にて



「郡山地域の戦争と平和を考える会」との交流集会  
12年8月11日 福島県郡山市にて

## 発行にあたって

この冊子は、2012年8月15日「全国空襲被害者連絡協議会 2周年のつどい」において、鎌田慧さんに「3.11東日本大震災、福島第一原発事故が問うもの」と題して1時間講演をして頂いたものを掲載しました。

2010年8月、私たちは「全国空襲被害者連絡協議会」を立ち上げ立法運動に取り組んできました。議員連盟のご尽力により「空襲被害者等援護法(案)」(仮称)が作成され、2012年末の臨時国会上程に向けて努力していたところ、突然に衆議院解散が行われました。その結果、法(案)上程は叶わず、「自公政権」が復活して「戦争をする国」にするために平和憲法の改悪を明言する勢力の動きが顕著になっています。

私たちは、1945年の敗戦と2011年3月の原発事故の過ちを繰り返してはならないとの決意を一層深めています。脱原発を願う国民の思いが遠のいていく状況にあります。大人たちの責任として「さよなら原発」の決意を後退させることなく運動を進めていくとき、鎌田慧さんのお話に学び広げることには大きな意義があると思います。

講演をしてくださった鎌田慧さんに感謝をこめて、ここに東京新聞火曜日「本音のコラム」を添えて、一人でも多くの方にこの冊子が届きますことを願っています。

2013年3月 記 (全国空襲被害者連絡協議会)

## もくじ

1. はじめに.....	2
2. 1945年敗戦と大岡昇平.....	3
3. 福島原発事故は原発敗戦.....	5
4. 被曝労働者.....	6
5. 被曝労働によって成り立つ原発.....	8
6. 日本の労働構造と差別.....	10
7. 原発産業を輸出してはならない.....	12
8. 日本はアメリカの原子力産業の消費地.....	14
9. 原発地域を金で支配する.....	15
10. 原発産業がなくてもやっていける議論を重ねていく.....	19
11. 補償の問題を解決して、折り目正しい国にする.....	21
12. 「原子力基本法」の改悪.....	22
13. 大間原発と熊谷あさ子さん.....	24
14. 一人一人の決意と行動で新たな日本を作る.....	27

(講演記録の小見出しは編集担当者がつけました)

### 1. はじめに

このような記念すべき集会にお招き頂きましてありがとうございます。私も戦後補償をきちんとしない限り、これから戦争を絶対にしないという反省になっていないという意味でこの運動を支持しております。中山弁護士さんとは狭山事件で一緒にやらしてもらってしまして色々な形でお付き合いしてまいりました。その意味でも今日お招き頂きましてありがとうございます。

今日8月15日は、私はちょうど国民学校一年生という年齢でして、青森県の弘前市というところの出身ですけど、天皇の放送はそのずーっと山奥の目屋という村山で聞いてました。疎開してました。実は全然空襲はなかったのですが「建物疎開」がありまして、空襲に備えて住宅を取っ払うという政策で、空襲の延焼を防止するという目的でわが家にかかってきました。そういう意味で、私の田舎の方には東京から疎開児が来ていましたけど、そこの住民がまたさらに山奥に追い払われるという、あまり知られていない戦争の被害があったわけです。その日のことはよく記憶してましてよく晴れた日でした、蟬の音が強かったと記憶しています。そして両親はラジオの放送を聴いて泣いていた記憶があります。

そのような体験がありまして、今、さよなら原発運動をやっているんですけど、これを一緒にやっている大江健三郎さんとか、内橋克人さんとか、澤地久枝さんとか、瀬戸内晴美さんと



か、鶴見俊輔さんとか、辻井喬さんとかそういう方々も、戦後の青空とこれから始まる新憲法下の民主主義を期待していた人たちだと思います。そういうふうな思いがあります。それから落合恵子さんとか、坂本龍一さんは少し年令が下ですけど、一緒の同世代あるいは、ちょっと上の世代の方は、新憲法の平和に対する決意という言葉をずーっと噛み締めて、そして今の原発反対運動をされているというふうに思っています。

## 2. 1945年敗戦と大岡昇平

そういう意味でこの原爆と原発反対運動を結んだ運動を今しているわけですけど、例えば大岡昇平さんの「俘虜記」という小説があります。大岡昇平さんはフィリピンのレイテ島の捕虜収容所に収容されていました。そこでは英字新聞を読んでいたから日本の戦局はよく知っていました。日本が敗戦に向かうプロセスを英字新聞で、よく読んでいたんですね。6月からポツダム宣言の問題もあったことをよく知っていました。今晚のNHKテレビで敗戦を決断しなかった問題についてやるわけですけど、これはよく知られている話ですけど、つまり御前会議を開いても空転していて全く決まらなかったわけですね。まだ阿南陸軍大臣は本土決戦、玉砕を主張していたわけで、天皇の国体護持のために会議は空転してまして、ポツダム宣言を受けないうちに、その前にもう東京空襲がありましたけど、首都が空襲されてもなお降伏しない、これはやはり異常な国だった

と思いますね。それから広島がありまして、それでもなおかつまだ降伏をしなかった。どれだけその間に犠牲になったのかです。そして長崎の原爆がありまして、さらに色んな都市に爆弾が落とされてまして、たぶん熊谷とかいくつかの町が最後の空襲になって、ほんとに無駄な何とも言えない被害があったと思います。

これだけの犠牲を払ってでもなおかつ国体護持、天皇制護持を主張していたのです。大岡昇平は何と書いているかと言いますと「天皇は有害である」ということを明確に「俘虜記」のなかに書いています。つまり決断しなかったわけですね。そしてもう一つ書いているのは、日本は50年来軍隊によって国を成してきた。それで国民も利益を得てきた。そこから脱却すべきであって、明治以来の日本人が刻苦して困難を乗り越えてきた力があれば、また乗り越えていけるというふうに言っています。つまり軍部に支配され依存してきた国から、新たな平和な世界に向かっていくということを収容所で考えていましたし、実際、軍隊の支配から脱して新たな平和国家に向かって出発したわけです。軍需産業も全くそうして壊滅的な状態からナベ、カマを作るという形で平和産業に転換してきたのです。そのことを思うと、今、まだ日本の原発産業、例えば三菱重工とか東芝とか日立とかIHIとか日本製鋼、室蘭の日本製鋼は大砲の砲身を造る鑄造技術で優れていた。そういうところがそのまま原発産業として復活したわけですね。軍需産業として復活し、なお



かつ原発産業として復活している。それを知ったら大岡昇平は  
どういうふうに思うだろうか。彼は天皇制を護持して余計な犠  
牲を払ったことに対して憤慨していましたから、文化勲章を拒  
否していますね。天皇から文化勲章をもらうのは嫌だと拒否し  
ていました。

### 3. 福島原発事故は原発敗戦

そういうふうな人たちの指摘があって、私はそれを福島の原  
発事故に重ねて考えています。つまり今、福島があったあと次  
の原発の爆発事故がないかどうか。爆発事故が起こる前にどう  
それを阻止するのかというのは、長崎の前に早く敗戦を決めな  
ければいけない、早く原発から脱しなければならぬ、そうい  
うふうな状況にあると思います。当時の軍部はあるいは日本の  
支配者は、国体護持を考えていたわけですが、今まさに「経  
済が破綻する」という形で原発体制を維持しようとしています。  
これは新たな国体——財界、あるいは独占大企業の利益を守る  
というそういうふうな意味の一点だけで、原発を維持し稼働さ  
せていくというふうな状況になっていると思います。ですから  
今ほんとに原発を止めるというのはかつての国民の中にあつた  
厭戦気分、ほんとうに戦争に疲弊し、肉親が殺されるのは、ほ  
んともう嫌だという状況にそっくりな状況であつて、必要な  
のは決断であるし、憲法の中に含まれている平和に対する決意、  
そういうふうな状況であると考えています。ですからそういう

意味で私は、福島の原発事故を、原発敗戦と考えていまして、  
全く新たな時代が始まっている。新たな時代を始めないと申し  
訳ない。これからの子どもたちに申し訳ないという気持ちで、今  
「さよなら原発運動」を始めたのです。

### 4. 被曝労働者

今日お見えの中山武敏さんとか、福島瑞穂さんとかそういう  
方々と狭山事件の運動を一緒にやらしてもらっていますが、  
そういう差別の問題とも深く関わっています。原発労働は最近  
漸く新聞記事になってきましたけど、膨大な被曝労働者を作り  
ながら始まっているわけですね。いまの収束作業のなかで膨大  
な被曝労働者が発生しているわけで、それで線量計を隠すとか、  
線量計をつけないで労働するとか、そういうことが今始まった  
みたいな形で書かれていますけど、全くそうじゃない。ずーっ  
と前からそういう状況だったわけですね。つまり被曝労働者が  
増えていて、仕事が終って、どこか地方に帰って山深い所とか、  
地方都市或いは全く原発に関係ない地域で、ガンになったり白  
血病になったりした人がいます。裁判で訴えた人もいます。し  
かしそれでは認められなかったわけですね。因果関係を立証で  
きなかったわけです。

私が最初取材した 1970 年代の始め頃は、福島原発の周辺に  
白血病とかガン患者が多数発生しました。それは樋口健二さん  
の写真集でも被曝労働者の写真が表れていますけど、ちょうど

同じ頃、私と樋口さんが回った被曝労働者のリストは同じリストでそれを手にして、一軒ずつ回った記憶があります。それから福島 of 病院にも行きました。それは被害を認めましたけど「因果関係は立証できない」というふうに医者には言っていました。つまり臨床的に原因が分からないわけですね。つまり原発労働に起因しているかどうかはわからない。ガン自体が次第に増えてきているから証明できないというのは70年代以来あったわけですけども、それから40年経ってもまだ原発の被害者が認定されない。いま現在被曝労働によって労災認定されたのは12人しかいないわけですね。40年原発が稼働して40年間いろんな労働者が働いていながらまだ12人。それも東海村のJCOの労働者2人。これはまごうかたない被曝でして、これもNHKで放送しましたからご存知でしょうけども、血管から皮膚からポロポロになってもう修復つかないで苦しんで亡くなったというのがありますけど。そういう労働者が無数にいて裁判で訴える。裁判で訴えることは大変なことで、その地域に弁護士さんがいないと訴えられないし、住んでいるところから裁判所に通うのは大変でしょうし、裁判費用もないし、時間もないしというふうなことでみんな泣き寝入りしているわけですね。

そしていま原発反対運動をやっている人たちの中にも、原発で働いてその中の状況があまりにもひどいから原発反対運動になったという人が結構います。例えば祝島でお会いした漁師の方も原発運動の中心になっていましたし、それから福島の浪江

町で榎倉さんという人が一生懸命原発反対運動やっていました。いま全町避難して全戸離散した地域ですね。ここはずっと40年間原発反対運動をやってきた地域です。東北電力の原発を認めなかったけれど、隣の双葉町の原発が事故を起こしたから、自分たちがずっと40年間原発阻止してきたけど全戸離村、故郷を去らなければならなかった悲劇の地であります。その反対運動をやっていた農民の榎倉さんという人も福島原発で働いてあまりにもひどいから反対運動になったというふうな人物です。

##### 5. 被曝労働によって成り立つ原発

元々、原発は労働者が働くようには設計されていないわけですね。ふつうそれほど資本家は労働者のことを考えているわけではありませんけども、それでも労働環境というのがありますし、労働者が少しでも働きやすいように労働運動があるわけですし、日本の或いは世界の労働運動、或いは労働政策というのは少しでも労働者を働きやすくして労災を少なくするというのが近代に向かってきた。イギリスの資本主義初期の公害と職業病は有名ですけど、それ以来労働法が作られたりして、労働者の保護が国家の課題であったわけですけど、原発に関しては一切そういうことがないわけですね。

今度の事故で明らかになったように収束作業で、熱中症で死亡した労働者が3人いますね。つまり熱中症になるほどの労働

環境であるわけですね。ましてそこが、放射線が充満していますから被曝する。ですから短期間、短時間の労働しかできない。私が昔よく聞いた話ですと、例えばベルトにロープを縛られていてヨーイドンで突入して、表の方で親方がストップウォッチを見ていて時間が来るとロープを引っ張るという話を聞いたことがあるわけですが、このように短時間でボルトを替えたり溶接したり、それも人海戦術でやっているわけですね。つまりどんな工場も何年か経つとメンテナンスが必要で修理しなくちゃいけないわけで、それは当然修理するわけですけど、原発の中も同じように時間が経つと修理しなくてははいけない。まして中性子が飛んでいますから金属は破壊されてどんどん劣化するわけですから、それも修理しなければいけない。

ですから昔の70年代は、例えば30年というふうな年限しかもたないはずだった。それが40年になりまして、今はなんと60年するとか言ってますけど、専門でないので申し訳ないですけど、金属破壊とかそういうことから考えたら原発工場はそれほど長くもつものではないんですね。それを騙し騙し修理してやる労働者が必要なわけで、その労働者が被曝するわけですね。ですから入れ替わり、立ち替わり入っていく。しかしそれは放射線を浴びて被曝しますから、一定の被曝した労働者はなかなか働けない。ということは彼等は失業するわけですね。ですから予備の労働者はなかなか集まらない。そして働いている労働者は働けない。ということがありますから今度問題になってい

るように、線量計のうえに鉛のふたをするとか、線量計をもたない労働者が現れています。

そもそもあの原発事故が起こった時に、線量計をもたない労働者が大量に投入されていました。ですからその労働者が今どうなっているのか報告されていませんけど、たとえば高濃度の液体の中に足を突っ込んだ労働者がいるとか、いろんな報道が散発的にありますけど、具体的には漸く1年半経って労働者の問題が現れてきたということですね。これからさらに現れてくると思います。そのうち追跡調査とか被曝手帳を給与するとかそういうことがますます重要になってくると思います。

## 6. 日本の労働構造と差別

原発労働の問題はたとえば失業状態の労働者を引っ張ってくる。これは大体今までは山谷、釜が崎から暴力団の手配師が集めて供給するということがありました。そもそも労働者派遣法というのは暴力団手配師の存在を認めるという状態でありましたから、今すでにそういう労働者派遣法にさえ違反する労働者の供給の仕方があったわけで、それはどうしてかというと原発で働く労働者の層が少ないわけですね。次から次に供給できない。失業者が多ければ食えないから入る人がいるでしょうけど、それでもなかなか原発に行かない労働者がいるから、どうなるかということ原発で働く労働者が不足してくる。労働者が不足すると原発が稼働できなくなるわけですね。すると同じ労働者を



使い回ししなければいけない。すると線量計を与えないとか線量計にふたをすとか、被曝の実態を隠すわけですね。被曝はしているけど被曝量は少ないという、こういうペテンです。

これはしかし、日本の労働構造の問題でして今に始まったわけじゃない。日本の労働構造の多重構造、つまり下請け、孫請けと言う労働構造は今に始まったわけじゃない。明治以来ずっとあったわけで、そういう差別構造の上に日本資本主義が発達してきたわけで、その労働構造の上に原発産業が乗っていたということですね。それがもっとも露骨な命に係わる労働であったわけで、今までの労災もほとんど孫請けクラスが犠牲になる労働だったわけですね。原発以前から、明治資本主義以来から下層労働者が、差別された労働者の犠牲が多い。例えば炭鉱事故が発生すると半分以上が「組夫」という下請け労働者であるとか、例えば北海道の夕張炭鉱の事故でも証明されているし、いくつかの労災事故が発生するとその構成メンバーを見ると、半分以上、3分の2以上あるいは全部が下請け、孫請け、或いはいわゆる「日雇い人夫」といわれていた労働者であったわけです。その土台のうえに原発産業が作られているから、原発産業自体だけの問題だけではない。日本の民主化の問題だし、日本の労働問題であったわけです。そういうふうな問題がいま直面してきて、これから原発の再稼働が増えていくに従って定期点検する労働者の被曝が増えるし、これから収束作業に従事した労働者の被曝の被害が現れてくる。そういう恐ろしい状況に

なってくるというふうに思っています。

## 7. 原発産業を輸出してはならない

さらに原発の問題は輸出産業に向かっていくということにして、これは70年代にあった公害輸出の同じパターンですね。だいたい公害問題は水俣病が公害病として認定されたのは1968年だと思えますけど、70年が公害元年と言われまして、いろんな地域の公害反対闘争が噴出していたわけです。四日市の大気汚染問題、或いは神通川のイタイイタイ病の問題、そして水俣病の問題は厚生省前での座り込みとか、そういう苦しい長い闘争があったわけです。そして東京の街にもいろんな工場がありましたね。実は私は「鉄鋼新聞」という鉄鋼の記者だったわけで、東京の鉄鋼メーカーはほとんど回ってよく知っています。鉄鋼が日本資本主義の基幹産業ということがありまして、鉄鋼のことが知りたいと思って記者になったわけです。東京の鉄鋼工場は全部知っています。その鉄鋼工場は東京には今はほとんどないです。今はほとんどマンションになっていますね。これは公害規制です。ほとんど地方に行きました。鉄鋼ばかりかいろんな産業が地方に行きまして、地方でも産業都市に行きまして、これは新産都市と言われましたが、辛酸をなめる苦しい「辛酸都市」と名前がついたほど公害で苦しみました。すべての新産都市は公害になりまして、それでアジアに向かっていったわけです。これは70年代以降のことです。化学産業とかはアジ

アに向かっていたわけですね。

こんど原発は日本はもう新增設できないから、それをアジアとか中東に輸出していこうというのは、公害産業を輸出していたのと同じ構図ですね。自分のところがよくなれば、他の国はどうなってもいいとそういう形で、原発産業を輸出していく。今までの投資した経費を回収していこうというそういうふうな状態になってきていると思います。

それはすでに私が言うまでもなく、日本に輸出されてそれを受けて造ったこのゼネラルエレクトリックの原発は、こんどの福島で事故が発生した原発は、ゼネラルエレクトリックの危険だと指摘されていた原発ですけど、ゼネラルエレクトリックと日立が提携する。或いはウェスティングハウスと東芝が提携する。そして三菱重工とフランスのアレバが提携する。そういう国際的な原子力産業として世界に輸出していく、そういうふうな構造になっているわけですね。これからももんじゅと再処理工場は、たぶん私の希望的観測以上の強い確率で言えば、六ヶ所村の再処理工場は無理ですし、もんじゅも無理でしょう。

もう政府も再処理をしないで直接処分する方法を考えるようになってきたようです。プルトニウムを再処理工場で作って、もんじゅで精製するという核燃料サイクルは、破綻しています。それでもまだ再処理工場にこだわっているのは輸出した先の廃棄物を、日本が引き受けるといふ野望があるからだだと思います。韓国でも再処理工場を造るといふ形になっていますが、アメリ

カが抵抗しています。そういうほんとに危険な死の商人という汚い産業に依存して、日本資本主義を維持していこうという、とんでもない状況になったわけです。そういう意味でも原発産業がいかにか社会を汚染していくのか、或いは外国への核拡散になっていくわけですから、原発がなければ原爆ができない。原爆から原発が造られて、原発からさらに原爆に回っていくという、そういう形で原子力産業がすすめられてきたわけですね。

## 8. 日本はアメリカの原子力産業の消費地

そもそも日本の原発産業は 1954 年、ちょうどビキニ環礁で第五福竜丸が被爆した時、衆議院では中曽根康弘たちの議員提案で、2億 3500 万円の原子力予算が作られたわけです。2億 3500 万円は広島に落とされたウラン 235 をもじった 2億 3500 万円ですから、なんと無神経なことだったか。国会が 2億 3500 万円という予算を中曽根たちの提案で通過したとき、「提案はウラン 235 をもじったんだ」と言って通過しているわけです。なんと被爆者にたいする想像力がなかったことか。そこから日本の原子力産業が旧財閥を中心に復活します。その原子力予算を元に。そしてアメリカで作られた濃縮ウランが日本に輸入されて、それが原料になっていくという。そういうふうな形の原子力開発だったわけですね。本当に屈辱的というか、2度も被爆した国がアメリカの原子力産業の消費地になっていった。当時の日本の歴史を振り返ると、広島に原発を造るといふような構

想もあったのですね。これは生傷に塩を塗るようなやり方だと思いますけど、しかしその頃はそのぐらいのことによって、原発が、平和利用がいかにか安全かという宣伝ですね。つまり被爆地に原発を造るのは、戦争から平和に転換するという格好の看板にするためにアメリカが構想した方法です。言うまでもなくアトミックオブザピース。そのピースが、アイゼンハワーが言ったピースが、「平和産業」という形になりまして、日本に怒涛のごとくと言うとオーバーですが、福島など日本の沿岸にこれだけ大量の原発が造られた。それを受け入れてきたわけですね。それは財界がもちろん三菱、住友、三井、東芝ですけど、それを中心にしたかつての軍需産業が、原発を引き受けたということがあります。その平和利用という宣伝の仕方がいかに強烈だったかですね。被爆の犠牲を払拭して平和に切り替えるというかなりの荒業ですけど、これはマスコミを中心にしたわけで、有名な話ですけど読売新聞を支配した正力松太郎さんが初代の原子力委員長になるとか、それから科学技術庁長官になるとか、そういう形で、宣伝にこれ努めてこういうふうな状況になったわけです。

## 9. 原発地域を金で支配する

しかし原発の建設地域ではすべて反対運動がありました。それは平和のためとか安全だと言っても、地元の人たちには原爆の体験が或いはその記憶が色濃く残っていたからです。日本人

は丸木位里さんとか丸木俊さんの原爆の図とか、大田洋子さんの小説とか、原民喜さんの詩とか小説とか、林京子さんの小説とか、それから黒澤明さんの映画とか、そういう文学とか映画とか、マンガのはだしのゲンとか、そういうきわめて反原爆の文化が発達してしまっていて、それが日本中のいろんな人たちの意識の中に残っているわけですね。これが他の国の原発とは全く違う状況です。すべての地域で反対運動があったわけですね。それをつぶすためにはお金しかなかったわけですね。安全だと言われても潜在意識の中には危険だというふうに思っているわけですから、なかなか説得し切れなかった。

それを説得したのは、お金です。これは田中角栄さんの時に電源三法交付金を作ってインフラのところに金を投入するという形になりましたね。一般予算には使わない。建物に使う。原発立地地域には体育館とか武道館とか公民館とか巨大な建物が造られています。それは電源三法交付金で作ったわけですから、つまり一般財源にはならなかったから、地域の発展には寄与しなかったわけです。時限立法ですから、7年間は金を払うけど7年経つとお金が切れるというそういうお金です。つまりモルヒネと同じで、一時的な効果しかあがらなかった。だからさらにその自治体が成立するためには次の原発を作って新たな交付金をもらうという繰り返しになって、軒並みに複数の原発が造られるという形になったわけですね。だからそういう原発地帯に行ってみるとお分かりでしょうけど、地域は全然発達して



いません。

それは例えば原発関連のクリーニング屋とかレンタカー会社とかそういうものはあります。気が利いた人は下請工場を作るとかなんかで少しは還元していますが、地域全体には波及しなかったわけですね。ですから波及しないように一般財源に使わないで、無駄な金ですね。巨大な公民館とか武道館とかを造らせる金になったわけですから、これはすごい汚いやり方で、つまり原発を受け入れて、その地域に金は配るけれども、その地域が発展しないように、何時までたってもどこから手が出るような状態にしてきた。つまり政治の貧困がどこから手を出すような状況に追いやっておいて、そこに原発のえさをぶら下げて、これを食うと生活が安定するよと言ったけれど生活が安定しなかったわけです。

そして原発が入る前にやったのは先進地視察という、地域丸ごとの人たちを全部飛行機や新幹線に乗せて見学に連れて行くという方法ですね。飲ませ食わせしたわけで、例えば能登半島の珠洲市で、先進地視察で旅館に泊めて転んだ銚子が500本とかそんな数字が記録されてあるわけです。私が会った人は10数回先進地視察に行ったというふうに言ってます。10数回というのは北海道の泊から鹿児島島の川内まで、全部原発は見物したわけです。見物は2泊3日の飲ませ食わせがついたわけです。ですから仲間達と「こんどは博多の中州で一杯やりたいわ。」と言って、あそこは中部電力と関西電力が進出をねらっていたわ

けで、そこに言うと、早速担当者が連れて行くということです。それから夫婦子どもたちは原発に関係なく近くの火力発電に連れて行く。これは毎年夏休み連れて行ったそうです。そういうことをやってきました。

日本弁護士連合会の集会で、東大のある推進派の先生と弁護士さんたちとシンポジウムをやったときにその話をしたら、その教授はなんと言ったかという。「それは会社の宣伝費だ」と言いました。これは宣伝なんてもんじゃない。これは買収なんですね。或いは魂の買収といってもいいかもしれない。人々の心根を全部金で買収していくという、とにかくたかる。たかっていけばいい。これは自治体自体がたかりの構造になっています。

青森県のむつ市、原子力船むつの拠点港になったところです。むつ市の市役所の庁舎は撤退したダイエーのアウトレットの建物になっています。これは東電が撤退したダイエーの建物を買って、市に寄付したのです。あそこはいま中間貯蔵所を建設しようとしていまして、福島事故のあと工事はストップしていますが、東電と日本原電の資金、ほとんど東電が丸ごと買って与えているわけですが、市役所が東電に買収されても何とも思わないような構造ですね。これは色んな地域にあるいろんな施設がそうですし、福島原発のJリーグのサッカー場は、160億円で東電が寄付したもので有名な話です。とにかく金に飽かせてやってきた。

## 10. 原発産業がなくてもやっていける議論を重ねていく

ですからちょうど、軍部がすべてを支配して、大岡昇平がこの50年来日本の社会は軍部によって生活してきた。軍部が帝国主義的な進出をして中国とか朝鮮を支配して、そこに人々が移住して、ほとんど働いていた中国人たちを追っ払って、日本人がそこに住んだわけですから、日本人はそういうふうな生活をしてきたわけです。それが敗戦によって無くなったと言っても、新たな出発をすればいいわけですね。ですからいま原発に依存して財界はいるわけで、原発がなくなると食えないとか、経済が空洞化するとか、海外に逃げていくとか言ってますけども、それはもしそうだとしたとしてもそれでいいじゃないか、また新たな平和産業でやっていけばいいじゃないか、ということですね。

平和産業というのは自然エネルギーを中心にした再生エネルギーでやっていけばいいわけですし、もうすでにドイツは自然エネルギーに転換してもう3割が自然エネルギーというふうやっていますけど、その需要によってかつての原発労働者の雇用を完全に吸収しているというふうに言います。ですから経済政策の転換によって原発依存から完全に脱却できる。そういう道筋がもう見えているわけですね。まだ日本のマスコミも含めて、原発に依存して食っていかうという気持ですし、地域も原発がなくなると食っていけないという形で原発再稼働運動が始まっています。例えば福島が事故が発生してすぐ、下北半島の大間

町とかむつ市とか東通村とか六ヶ所村とかそういう関係町村ここは全部、三法交付金あるいは核燃料税で金が入ってくるんですけど、この商工会は原発再開あるいは建設再開の陳情をしています。これはそこに従属しているからですね。原発産業に依存した経済構造になっているわけです。それをやめて新たな産業を作っていけばいいわけです。原発の金をやめて或いは当面は原発三法交付金の代わりにやめるというところに資金を出す。あるいは新たな自然エネルギーのところに持っていか、そういう形で地域が潤っていけばいいようにすればいい訳ですから、それで新たな雇用を創っていけばいい訳で、そういう展開が大胆にやっていけばやっていけるし、少しの間は減収になるかもしれないけど、それで我慢していくということですね。

大岡昇平は「明治以来の刻苦、苦しいのを克服していく克己でやっていけるし、日本はまた復興する」と言ってまして、日本は大岡昇平が言ったとおりになったわけですね。日本は軍需産業から鍋釜を作って平和産業に転換して、経済大国がいかどうかは別にして、経済的にあがってきたわけです。その余勢を駆って原発産業が入ってきたわけですからね。原発産業がなくてもやっていけるというふうな議論をこれから重ねていく必要があると思います。一つは炭鉱地帯が閉山する時に閉山交付金を作ったわけだし、色んな予算措置をつくれるし、あるいは原発をやめるところには奨励金を出すとか、そういうふうな課

題になってきていると思います。

### 11. 補償の問題を解決して、折り目正しい国にする

もう一つの問題は補償の問題です。補償しない限り反省はないわけですね。もう絶対にやらないというのは、補償金をちゃんと払ってそれで謝罪して、それから新しい方向にむかって行くわけですね。日本政府には、ドイツとちがってその決意性がないわけですね。これは空襲だけではない。水俣病にしてもそうですし、ハンセン病は一応謝罪して補償金を払っていますけども、今住んでいる施設に強制的に収容していながら、段々追いたてられるかも知れないという不安感がありまして、政府の方針が問題になっています。それから水俣病も打ち切られたわけですし、これから原発の被曝者、被曝地域の補償をどうするかという問題があります。

つまり今まで政府はきちんとした補償をしないで、どんなに批判されても、知らん顔して通り過ぎてきたわけです。きちんと補償するという習慣を全くつけない、全くなおざりにしてきたわけですね。朝鮮人慰安婦の問題もそうですし、ほんとに何という国に私たちが住んでいて、それに安閑として暮らしてきたかということだと思います。

そういう意味でもこの空襲の補償をきちんとする。きちんとした道筋をつけていく。そういう形で戦争はもうしない。それから原発ももうやめるといふ、そういう折り目正しい国にしな

ければいけないと思います。これは哲学的な問題でして、どう日本の社会を作るのか、どう過去と折り合いをつけて私たちは生きていくのかという問題です。日本の国は、日本の政治家は、そこをきちんと議論してこなかったと思います。あえてドイツの例を言うまでもなくドイツは戦後補償をきちんとやってきましたし、それから原発も廃止すること決めたわけで、そういう国家像といいますか、どういう国にしていくのか。

そういうことが無いというのは、一つは日本の地勢学的な問題があつて、島国に隠れているというところがあると思いますね。大陸にいますと人間が行ったり来たりする。人の交流が激しいからすぐ人に批判されます。日本の場合はまだ鎖国的なところがありまして、そんなに世界から見えないとか、世界の人たちとあまり交流しないという意識のままですけれど、もうしかし、政府自体が国際化ということを言ってるわけで、国際化によって日本の社会が成り立っていくということになっているわけですから、こういうことを解決しないままでは、国際化には、ほど遠いと思っています。

### 12. 「原子力基本法」の改悪

もう一つの問題は、最近かなり批判が出てきましたけど、原子力基本法の改悪。第2条に対する附則の問題で、「安全保障に資する」という文言が入ってしまったという問題です。これはとにかく国会で早くもう一度直してほしいですね。そもそも原



子力基本法は平和利用という形で原子力開発をするために作られたわけですね。中曽根さんが54年に2億3500万円の予算を作って、「学者がぼやぼやしていたから、ほっぺたを札束でたたいた」という有名なせりふがありまして、それに対して学会会議の人たちが、とにかく原子力開発は平和利用でなくてはいけないという形で、自主、民主、公開という規制を入れました。しかしもうすでに公開は秘密だったし、自主は従属だったし、民主は独善だったわけで、そのはじめから、決して自主、民主、公開ではなかったわけですね。それにもう一度、「安全保障に資する」という文言を法律に入れた。これは世界から見たら本当に日本がもう一度核武装に向かっていくんじゃないかと、そういう恐怖を与えていくと思います。原子力基本法の改悪はなおさらいけない。この基本法があるからこそ、原発はなくならない。

これに対して細野原発長は何と言ったかといいますと、「これは民主党が考えたんじゃなくて自民党が要請したからそれに応じた」ということを言っています。民主党が考えたんじゃなくて、自民党が言ったからそれに従ったということは、彼らは政局しか考えていないということですね。この国家の最も基本的な問題である安全保障を政局の、たとえば消費税を通過させるためかもしれない、そういう政局でしか考えていない、残念ながら。そういう問題があります。

とにかくこの原発をやめて自然エネルギーに、どういうふう

な形で転換していくのかというそういう新しい時代にかかっている。それは今までのように大きな原発を造って広大な地域をカバーして支配していくという発想が敗退したということですね。最初の原発は16万キロワット、次は30万キロワット、60万キロワット、100万キロワット、120万キロワット、いま132万キロワットぐらいまで巨大化されていますね。これだけ巨大な原発をどんどん歯止めもなく造ってきて、そして広い地域、完全独占地域を支配して、発電も送電も全部独占するこういうことは許されることではなかったわけですね。これは軍需産業の論理ですね。強いものを造っていくという。

そうではなくて地域、地域で発電していくという、そういうふうな時代に入ってきているわけだし、色んなことができるわけですね。小さい川でも簡単な発電ができるし、小さい風力でも発電できるし、小さいパネルでも太陽光発電ができるし、巨大から小さいものへあるいは自分達で管理できるものへとか、あるいは共同でやっていくとか、そういうふうに社会の仕組みを変えていこうという、そういう民主主義的な運動にもなっていると思います。

### 13. 大間原発と熊谷あさ子さん

先ほど大間原発の話をしました。ここは下北半島の最先端にあります。ここに建設する、経済産業省の許可条件は、近隣の集落から離隔している、離れて隔絶しているというそういうの

が条件でした。つまり離隔している条件が許可の条件に合うというわけで、許可の判子を押しているわけですけど、これは全くインチキです。というのはその周辺は確か7千人しかいない。しかし津軽海峡の向こう側が北海道で、あそこから函館が見えます。函館周辺は30万都市です。20数キロはなれたところに30万都市がある。それを知っていながら許可している。「人口が少ないから許可した」と言っているながら、対岸に大きな都市があるのを、それを見ない振りして許可しているということですね。

大間はフルMOXですからプルトニウムを燃焼させる、最も危険な原発です。たぶんこれも私の希望的観測で言うわけですけど、これもできないです。まだ新築ですが3割ぐらい、また建屋しかできていません。まだ原子炉は運ばれていないですけど、水の手当てがまだできていません。だからこれからダムを造るとか色んな作業をしなくては原発ができないですけど、そういうことはもうできる条件で無い。

だから今計画されているのは、大間原発と東通の東京電力、それから島根原発3号炉でありますけど、東通の本通りの東京電力も進捗率もまだ20%か30%で、これも今のうちにやめた方がいい訳で、大間はもうほとんど見通しが無い。これも電源開発、Jパワーのはじめての原発ですが、見通しが無い。

初めは漁業協同組合が反対してましたけど、農地もほとんど買収されて、漁業共同組合が反対して長い時間のうちに指導部

が買収されて、3/2の議決で漁業権が放棄されます。今まで原発が予定されていて反対闘争で勝ったところは漁業権を放棄しなかったところなんですよ。今までいくつも勝っています。例えば串間（宮崎県）とか、芦浜（三重県）とか、珠洲（石川県）とか、巻（新潟県）とかいろんなところで反対運動で勝っているところがあります。負けたところは組合を牛耳っていたボスの民主化運動ができなくてそれも、30年ぐらい経っているわけです。

大間原発はたった一人の熊谷あさ子さんが抵抗して農地を売らなかったから、通産省に提出した許可条件が変わっています。つまり始めの設計図が反対によって抵抗されて、社長が2代にわたって熊谷あさ子さんの畑であさ子さんに頭を下げたけど彼女は売らなかったです。それでどうしたかという設計を変更しています。熊谷さんの畑をはずして設計しているという、こんな原発です。ですからどこでもいいんですよ、原発は。それで遅れてしまっていて、もうたぶんあその原発はもう稼働できないと思っているんですけど。

熊谷さんは何故反対したかということです。熊谷さんが言ったのは、「畑と海があれば人間は生きていける。」と言ってました。つまり畑と海がなければ人間生きていけないということですね。

いま福島状況を見るとそうです。原発の事故によって畑と海が汚染されたから、あその近くに住んでいた人たちはもう

そこでは生きていけない、そういう状況です。それを熊谷さんは「私は絶対売らない。畑と海があれば生きていける。」と。彼女の夫は早く亡くなっていますが、漁師でして夫婦一緒に漁に出ていました。今は息子さんが出ていますけど、そういうふう  
に漁をして、畑で野菜を採って暮していけば暮していけるという、その基本的な考え方を日本人は捨てて、やっぱり原発を入れてアブク銭で暮していこうと思ってきたわけですが、しかし地域は分断されて散り散りになってしまってる訳で、事故前からですね。そして事故でもう帰れない。

#### 14. 一人一人の決意と行動で新たな日本を作る

こういう歴史をきちんと見ながら、原発はもう絶対許せない、そして新たな社会に向かって進んでいくという、そういう国にしていく。つまり一人一人の人間をきちんと見ていく政治にしていく。そういうふうな運動も含めた原発反対運動であるし、その運動の、いま市民が代々木公園での17万人集会とか首相官邸や国会前にも数万人が集まっています。そういう人たちの笑顔を見てください。本当に解放された明るい笑顔をしています。こういう人たちがこれからの日本を作っていくわけです。

この東京空襲にたいする、戦後補償の問題も政府の戦争への反省として、日本の未来にむかってさらに一緒になって進めていければと思います。

ありがとうございました。



2012年2月11日 代々木公園

## 「全国空襲被害者連絡協議会」

〒131-0045 東京都墨田区押上1-33-4-102  
東京空襲犠牲者遺族会内

Tel・FAX 03(5631)3922

URL <http://www.zenkuren.com/>

E-mail [tokyokusyu@coral.bforth.com](mailto:tokyokusyu@coral.bforth.com)

2013年3月発行